
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

(例) 吾妻橋《あずまばし》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

(例) [#地から1字上げ] (大正五年十一月二十三日)

僕は、船のサルーンのまん中に、テーブルをへだてて、妙な男と向いあっている。

待ってくれ給え。その船のサルーンと云うのも、実はあまり確かでない。部屋の具合とか窓の外の海とか云うもので、やっとそう云う推定を下《くだ》しては見たものの、事によると、もっと平凡な場所かも知れないと云う懸念《けねん》がある。いや、やっぱり船のサルーンかな。それでなくては、こう揺れる筈がない。僕は木下杢太郎《きのしたもくたろう》君ではないから、何センチメートルくらいな割合で、揺れるのかわからないが、揺れる事は、確かに揺れる。嘘だと思ったら、窓の外の水平線が、上ったり下ったりするのを、見るがいい。空が曇っているから、海は煮《にえ》切らない緑青色《ろくしょういろ》を、どこまでも広げているが、それと灰色の雲との一つになる所が、窓枠の円形を、さっきから色々な弦《げん》に、切って見せている。その中に、空と同じ色をしたものが、ふわふわ飛んでいるのは、大方《おおかた》鷗《かもめ》が何かであろう。

さて、僕の向いあっている妙な男だが、こいつは、鼻の先へ度の強そうな近眼鏡をかけて、退屈らしく新聞を読んでいる。口髭《くちひげ》の濃い、顴《あご》の四角な、どこかで見た事のあるような男だが、どうしても思い出せない。頭の毛を、長くもじゃもじゃ生やしている所では、どうも作家とか画家とか云う階級の一人ではないかと思われる。が、それにしては着ている茶の背広が、何となく釣合わない。

僕は、暫く、この男の方をぬすみ見ながら、小さな杯《さかずき》へついだ、甘い西洋酒を、少しずつなめていた。これは、こっちも退屈している際だから、話しかけたいのは山々だが、相手の男の人相が、甚《はなは》だ、無愛想に見えたので、暫く躊躇《ちゅうちょ》していたのである。

すると、角顴《かくあご》の先生は、足をうんと踏みのばしながら、生あくびを嚙《か》みつぶすような声で、「ああ、退屈だ。」と云った。それから、近眼鏡の下から、僕の顔をちょいと見て、また、新聞を読み出した。僕はその時、いよいよ、こいつにはどこかで、会った事があるのにちがいないと思った。

サルーンには、二人のほかには誰もいない。

暫くして、この妙な男は、また、「ああ、退屈だ。」と云った。そうして、今度は、新聞をテーブルの上へ抛り出して、ぼんやり僕の酒を飲むのを眺めている。そこで僕は云った。

「どうです。一杯おつきあいになりませんか。」

「いや、難有《ありがと》う。」彼は、飲むとも飲まないとも云わずに、ちょいと頭をさげて、「どうも、実際退屈しますな。これじゃ向うへ着くまでに、退屈死《たいくつじに》に死にしまうかも知れません。」

僕は同意した。

「まだ、ZOILIA の土を踏むには、一週間以上かかりましょう。私は、もう、船が飽き飽きしました。」

「ゾイリア ですか。」

「さよう、ゾイリア共和国です。」

「ゾイリアと云う国がありますか。」

「これは、驚いた。ゾイリアを御存知ないとは、意外ですな。一体どこへお出《い》でになる御心算《おつもり》か知りませんが、この船がゾイリアの港へ寄港するのは、余程前からの慣例ですぜ。」

僕は当惑《とうわく》した。考えて見ると、何のためにこの船に乗っているのか、それさえもわからない。まして、ゾイリアなどと云う名前は、未嘗《いまだかつて》、一度も聞いた事のない名前である。

「そうですか。」

「そうですとも。ゾイリアと云えば、昔から、有名な国です。御承知でしょうが、ホメロスに猛烈な悪口《わるくち》をあびせかけたのも、やっぱりこの国の学者です。今でも確かゾイリアの首府には、この人の立派な頌徳表《しょうとくひょう》が立っている筈ですよ。」

僕は、角顴《かくあご》の見かけによらない博学に、驚いた。

「すると、余程古い国と見えますな。」

「ええ、古いです。何でも神話によると、始は蛙《かえる》ばかり住んでいた国だそうです。パラス・アテネがそれを皆、人間にしてやったのだそうです。だから、ゾイリア人の声は、蛙に似ていると云う人もいますが、

これはあまり当《あて》になりません。記録に現れたのでは、ホメロスを退治した豪傑が、一番早いようです。

」

「では今でも相当な文明国ですか。」

「勿論です。殊に首府にあるゾイリア大学は、一国の学者の粹《すい》を抜いている点で、世界のどの大学にも負けないでしょう。現に、最近、教授連が考案した、価値測定器の如きは、近代の驚異だと云う評判です。もっとも、これは、ゾイリアで出るゾイリア日報のうけ売りですが。」

「価値測定器と云うのは何です。」

「文字通り、価値を測定する器械です。もっとも主として、小説とか絵とかの価値を、測定するのに、使用されるようですが。」

「どんな価値を。」

「主として、芸術的な価値をです。無論まだその他の価値も、測定出来ますがね。ゾイリアでは、それを祖先の名誉のために MENSURA ZOILI と名をつけたそうです。」

「あなたは、そいつをご覧になった事があるのですか。」

「いいえ。ゾイリア日報の挿絵《さしえ》で、見ただけです。なに、見た所は、普通の計量器と、ちっとも変りはしません。あの人が上《あが》る所に、本なりカンヴァスなりを、のせればよいのです。額縁や製本も、少しは測定上邪魔になるそうですが、そう云う誤差は後で訂正するから、大丈夫です。」

「それはとにかく、便利なものですね。」

「非常に便利です。所謂《いわゆる》文明の利器ですな。」角顙は、ポケットから朝日を一本出して、口へくわえながら、「こう云うものが出来ると、羊頭《ようとう》を掲げて狗肉《くにく》を売するような作家や画家は、屏息《へいそく》せざるを得なくなります。何しろ、価値の大小が、明白に数字で現れるのですからな。殊にゾイリア国民が、早速これを税関に据えつけたと云う事は、最も賢明な処置だと思いますよ。」

「それは、また何故《なぜ》でしょう。」

「外国から輸入される書物や絵を、一々これにかけて見て、無価値な物は、絶対に輸入を禁止するためです。この頃では、日本、英吉利《イギリス》、独逸《ドイツ》、奥太利《オオストリイ》、仏蘭西《フランス》、露西亜《ロシア》、伊太利《イタリイ》、西班牙《スペイン》、亜米利加《アメリカ》、瑞典《スウエーデン》、諾威《ノールウエエ》などから来る作品が、皆、一度はかけられるそうですが、どうも日本の物は、あまり成績がよくないようですよ。我々のひいき眼では、日本には相当な作家や画家がいそうに見えますがな。」

こんな事を話している中に、サルーンの扉《ドア》があいて、黒坊《くろんぼ》のボーイがはいって来た。藍色《あいいろ》の夏服を着た、敏捷《びんしょう》そうな奴である、ボーイは、黙って、脇にかかえていた新聞の一束《ひとたば》を、テーブルの上へのせる。そうして、直《すぐ》また、扉《ドア》の向うへ消えてしまう。

その後で角顙は、朝日の灰を落しながら、新聞の一枚をとりあげた。楔形文字《せっけいもじ》のような、妙な字が行列した、所謂《いわゆる》ゾイリア日報なるものである。僕は、この不思議な文字を読み得る点で、再びこの男の博学なのに驚いた。

「不相変《あいかわらず》、メンスラ・ゾイリの事ばかり出ていますよ。」彼は、新聞を読み読み、こんな事を云った。「ここに、先月日本で発表された小説の価値が、表になって出ていますぜ。測定技師の記要《きよう》まで、附いて。」

「久米《くめ》と云う男のは、あるでしょうか。」

僕は、友だちの事が気になるから、訊《き》いて見た。

「久米ですか。『銀貨』と云う小説でしょう。ありますよ。」

「どうです。価値は。」

「駄目ですな。何しろこの創作の動機が、人生のくだらぬ発見だそうですからな。そしておまけに、早く大人《おとな》がって通《つう》がりそうなトーンが、作全体を低級な卑《いや》しいものになっていると書いてあります。」

僕は、不快になった。

「お気の毒ですな。」角顙は冷笑した。「あなたの『煙管《きせる》』もありますぜ。」

「何と書いてあります。」

「やっぱり似たようなものですな。常識以外に何も無いそうですよ。」

「へええ。」

「またこうも書いてあります。この作者早くも濫作《らんさく》をなすか。……」

「おやおや。」

僕は、不快なのを通り越して、少し莫迦《ばか》莫迦しくなった。

「いや、あなた方ばかりでなく、どの作家や画家でも、測定器にかかっちゃ、往生《おうじょう》です。とてもまやかしかは利《き》きませんからな。いくら自分で、自分の作品を賞《ほ》め上げたって、現に価値が測定器に現われるのだから、駄目です。無論、仲間同志のほめ合にしても、やっぱり評価表の事実を、変える訳には行きません。まあ精々、骨を折って、実際価値があるようなものを書くのですな。」

「しかし、その測定器の評価が、確かだと云う事は、どうしてきめるのです。」

「それは、傑作をのせて見れば、わかります。モオパッサンの『女の一生』でも載せて見れば、すぐ針が最高価値を指《さ》しますからな。」

「それだけですか。」

「それだけです。」

僕は黙ってしまった。少々、角顙《かくあご》の頭が、没論理《ぼつろんり》に出来上っているような気がしたからである。が、また、別な疑問が起って来た。

「じゃ、ゾイリアの芸術家の作った物も、やはり測定器にかけられるのでしょうか。」

「それは、ゾイリアの法律が禁じています。」

「何故でしょう。」

「何故と云って、ゾイリア国民が承知しないのだから、仕方ありません。ゾイリアは昔から共和国ですからな。Vox populi, vox Dei を文字通りに遵奉《じゅんぼう》する国ですからな。」

角顙は、こう云って、妙に微笑した。「もっとも、彼等の作物を測定器へのせたら、針が最低価値を指したと云う風説もありますな。もしそうだとすれば、彼等はディレムマにかかっている訳です。測定器の正確を否定するか、彼等の作物の価値を否定するか、どっちにしても、難有《ありがた》い話じゃありません。が、これは風説ですよ。」

こう云う拍子《ひょうし》に、船が大きく揺れたので、角顙はあっと云う間に椅子から、ころがり落ちた。するとその上へテーブルが倒れる。酒の罎《びん》と杯《さかずき》とがひっくりかえる。新聞が落ちる。窓の外の水平線が、どこかへ見えなくなる。皿の破《わ》れる音、椅子の倒れる音、それから、波の船腹へぶつかる音、衝突だ。衝突だ。それとも海底噴火山の爆発かな。

気がついて見ると、僕は、書斎のロッキング・チェアに腰をかけて St. John Ervine の The Critics と云う脚本を読みながら、昼寝をしていたのである。船だと思ったのは、大方《おおかた》椅子の揺れるせいであろう。

角顙は、久米のような気もするし、久米でないような気もする。これは、未だにわからない。

[# 地から 1 字上げ] (大正五年十一月二十三日)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房
1986 (昭和61) 年9月24日第1刷発行
1995 (平成7) 年10月5日第13刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月

入力：j.utiyama

校正：earthian

1998年11月11日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。